保育所での

子どもの発達と保育のポイント

０歳から就学前までの子どもの心身の成長発達と
保育者のかかわりについて、月ごとにまとめました。
保育所保育指針の改定を受け、保育課程を
編成される際の参考に、また保護者
支援の参考になれば幸いです。

Benesse® 次世代育成研究所

ベネッセ次世代育成研究所について

少子高齢化、核家族化のさらなる進行、女性の社会進出、
経済のグローバル化、ITによる情報化など、社会環境の変化が加速し、
家族のあり方や親子関係を含めた
子どもの成育環境に大きな変化が起こっています。

ベネッセ次世代育成研究所は、子育て世代の生活視点を大切にしながら、
妊娠出産、子育て、保育・幼児教育、子育て世代の
ワークライフバランスを研究領域として、
家族と子どもが「よく生きる」ための学術的な調査研究を行っています。

またその調査研究成果を、
子育て世代を支える産科・小児科などの医療機関、
保育・幼児教育の専門家や実践者の先生方に発信し、
よりよい子育て環境を作る一助となることを目指しています。

さらには、調査研究ネットワークを海外へも広げ、
複眼的、学際的視点から日本の次世代育成を考えています。

調査研究活動をホームページでもご紹介しています

発刊物・調査結果の無料ダウンロードや、
調査報告書の購入申し込みもできます。
シンポジウム等の最新情報も、ホームページをご覧ください。

発刊物のご紹介●
「これからの幼児教育を考える」バックナンバーや、幼児の遊びにみられる学びの展開を事例集にまとめた「学びの芽」が無料でダウンロードできます。

●調査・研究のご紹介
「幼児教育・保育についての基本調査」「乳幼児の父親調査」「妊娠出産子育て基本調査」の結果などが無料でダウンロードできます。

http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/
（各種検索エンジンで「ベネッセ次世代育成研究所」と検索してください）

発刊に寄せて

小田 豊 先生（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 理事長）

少子化と幼児教育と子育て支援と

最近、子どもの事件の多さに驚くとともに、その内容の複雑さに驚愕（きょうがく）させられることがあります。特に、親子の間で生命が失われるという事件には心を痛めるというよりも悲しくなってきます。今、わが国では少子化から超少子化の時代に入り、子どもたちの出生数の減少どころか全体の人口減少が始まったようです。一人ひとりの命の重さが過去のどの時代に比べても重く、大切になってきているのです。もちろん、少子化の問題は日本だけではなく、先進国の多くが抱えている悩みでもあります。しかし、そうした国々の方々からよく質問されることがあります。それは、日本では、子どもの数よりペットの数の方が多いというのは本当ですか、なぜなのですか？という問いです。確かに、ペットフード工業会の調査によると、2004年、犬と猫を合わせたペット数は2200万匹以上で、同年の０歳から１４歳の子どもの総数よりも多いのだそうです。

犬や猫を代表とする動物たちが、病人をはじめ、時に高齢者や孤独な人の心の癒（いや）しに貢献していることは知られています。しかし、今やそうした病気や高齢者の方々だけではなく、平凡な普通の健康な家庭の中に、ペットが子どもの数より多く存在することに少し違和感を感じませんか。決して動物嫌いではありませんが、ペットを飼う方々の言葉が気になるのです。例えば、「子どもと違って、素直で言うことを聞いてくれる。ホッとするし、心が癒される」とか「少々育て方を間違っても、子どもと違って大事にはならない」という話が寂しく感じられるのです。

なぜなら、一方で少子化の中で、先に述べたように子どもたちが親子関係に悩んでいることが少なくない現実があるからです。子育てに悩む多くの大人が出現してきているのです。少ない子どもを中心として家族が身を寄せ合って生活しています。買い物も、外に出て食事をするのも一緒という、親子密着型の家庭が多くなってきています。そうした密着型の家庭は親子関係がうまく機能しているのかと考えたくなるのですが、意外にも、子どもが何を考えているのかわからない、子どもの受験や進学については何でも知っているにもかかわらず、子どもが育つということはどのような道筋かは知らないという悩みがあるというのです。

日本では、伝統的に幼い子どものことを「ヤヤ子」と呼んできました。その言葉の由来は、幼い子どもはなかなかわかりがたいもの、という「ややこしい」からきていると言われています。子どもが幼ければ幼いほど「ややこしい」ものとして、そのややこしさをいとおしむために「ヤヤ子」と呼んでいたようです。そのややこしさから逃れ、動物へ癒しを求めてペットが増えているとは考えたくないのですが、面倒なことや煩わしさを避けた人間関係に向かう人々が出現してきたとしたら寂しい限りです。ドイツでは、子どもを授かると「天から与えられた謎」として、子育てを一種の謎解きのように楽しむと聞いています。「天から授かった宝物」と考える日本では、宝物ではない、ややこしいものではと感じた瞬間、何かが起こっているのでしょうか。

最近、保育所・幼稚園に入園してくる子どもたちの中に、他人と手をつなぐことを嫌う子が見られるそうです。また、ある小学校では、入学したばかりの子どもの中に、みんなと一緒に給食が食べられない子がいて苦労したという話を聞きました。自分の周囲で「くちゃくちゃと楽しく食べる仲間の姿」に泣き出す子もいて、しばらく保健室や校長室で「一人で食べさせる」こともあったそうです。また、子どもたちがどうも昔と違ってきた、いろいろと気がかりなことが多くなった、遊びにさえ意欲をあまり感じられない子が増えている、などが盛んに聞こえるようになってずいぶんたっています。

次ページへ続く→

ところが、今や状況はさらに進み、そうした子どもたちに生じている問題と重なり合うような問題を大人たちもまた抱え込むようになってきています。現在の人間は、明治時代なら一年間かかって得た情報を一日足らずで受けとると言われています。それほどの変化に巻き込まれれば、大人も子どもも影響を受けざるを得ません。こうした激変の中では、子どもも大人も同じように翻弄（ほんろう）されているということでしょう。ですから今、目に見えてきた問題の解決を子どもだけを見て考えることは無理があるのです。何をするにも親子でという家族が増えたと先に触れましたが、それをもって家族としての結びつきがしっかりしたとは言いきれないものがあります。「子育てがわからない、子どもへの接触の仕方がわからない」という親もまた増えているからです。家族単位の行動の範囲や時間が増えることは、核家族という小さい枠内から踏み出ない、出せない結果に過ぎないという側面をもっています。社会という大きな人間のコミュニケーションとつながらないままで紡ぎだされる稠密（ちゅうみつ）な関係は決して心豊かなものにはなりません。

そこに情報が多量に降り注いできます。その結果、子どもの進学の道筋はよくわかるけれど、子育ての道筋がわからないということになるようです。進学の道筋は、塾の選択など、いわば情報によりかかわることであり、子育てがわかるということは、子どもの引き起こす現象を見る目をもつことです。それができていないのですから、家族としての機能を果たしていないと言えるのでしょう。文部科学省の調査で不登校がやや減少してきたことがわかったのですが、依然として小中学生あわせて１２万人余との報告があります。調査の中で、不登校から再び学校に行きだした理由の中に「家庭が楽しくなったから」という答えがあります。もちろん、不登校にはさまざまに異なった背景があるに違いありません。しかし、この答えは、子どもたちにとって家庭が「楽しい」ところであることの意味の重要さを示唆しており、また家族として機能していることの大切さの示唆でもあります。子どもの変容をなんとかしようと手だてを考える大人自身がまず変わる必要があるのではないでしょうか。

こうした子育ての受難時代に、本実践集は、ベテラン保育者の日常の保育体験から丁寧に集められたものです。多くの保育者が多面的な指導へのヒントを得られるものと確信しています。

2008年10月

目 次

- はじめに……6～9
- 第1章　0歳～就学前までの乳幼児の発達と保育のねらい
  - 目　次……13
  - 0カ月～5歳3月……14～45
- 第2章　幼児の言動の意味と援助のポイント
  - 目　次……49
  - 本　文……50～111